

- 1 派遣期日 平成23年 11月2日（水）
- 2 研修先 学校名 新潟市立新津第二中学校
所在地 新潟県新潟市秋葉区荻島1-15-17
<http://www.niitu2tyu.city-niigata.ed.jp>
- 3 研修内容

文部科学省指定研究開発学校（特別支援教育）中間報告会（2年次）
研究開発課題： 発達障害等を含め、障害のある生徒や学校生活において特別な支援が必要な生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成及び指導の在り方に関する実践的な研究開発

（1）研究開発内容

- ① 学校生活において、支援が必要な生徒の実態と一人一人の教育的ニーズを把握する。
- ② 発達や学校生活上の課題に応じた教育課程を編成する。
- ③ 特別支援教室の機能を有する場を設定し、弾力的な学習集団や指導方法を工夫して、個別の生徒の課題に対応できる指導の在り方を明らかにする。

【具体的な研究開発内容として】

- ア 特別支援教室（スタディールーム：SR）の開設と運営
- イ 支援対象生徒の類型化及び教育課程の編成
- ウ 個別の指導計画（二中モデル）の作成
- エ 特別支援教室における教科担任制の推進
- オ 支援対象生徒の決定プロセスの確立
- カ 通常学級での配慮指導
- キ 自立活動等の指導計画の編成と評価

（2）主な研究内容

全ての生徒を仮想的に通常学級に在籍させ、その上で一人一人の「困り感」に応じた特別の教育課程を編成し、必要に応じて特別支援教室（スタディールーム）における指導を行う。

- ① 支援対象生徒の類型に応じた教育課程の編成
「生活・行動面」と「学習面」の「困り感」により抽出した生徒の実態を分析して、ABCの3つのタイプに類型化した。具体的には「生活・行動面」では、「日常生活の指導」「自立活動」が必要かどうか。「学習面」では、「生活単元学習」「作業学習」「教科学習における下学年対応」が必要かどうかを基に分類。
- ② 特別支援教室（SR）を中心とした支援
特別支援教室の機能を有する場としてスタディールーム（SR）を開設し、特別な支援が必要な生徒一人一人の課題に対応できるように工夫しながら指導している。

【SRでの主な支援内容】

Aタイプ	自立活動、生活単元学習、作業学習、5教科において下学年対応を中心に特別な支援が必要な教科、技能教科（通常学級での授業の補充・補強）
Bタイプ	自立活動、5教科の中から特別な支援が必要な教科
Cタイプ	自立活動、数学・英語の中から特別な支援が必要な教科

【教科学習における指導】3タイプ（A・B・C）共通で取り組んでいること

- ア 個別の指導計画に基づいた目標設定
- イ 自立活動を付加した教科指導
- ウ ワークシートの工夫
- エ 特別支援学級での指導法や教材の活用
- オ 授業記録の蓄積

（3）主な成果と課題（成果○と課題●）

① 教育課程の視点から

- 昨年度より、特別支援学級の名称をなくした。通常学級の生徒も特別支援学級在籍生徒も分け隔てなくお互いを同じ学級の生徒として受け入れ意識している。
- 現状の教科教員数では、現在と同じ方法で全学年全タイプSR開設は無理である。3学年全て現行の方法で行うには専門教科の教員数が足りない。そのため、今後SRの開設の仕方について検討していく必要がある。

② SR運営の視点から

- 現行の特別支援学級在籍生徒の中には、普通高校への進学希望等の理由から支援学級での授業に抵抗感をもち通常学級での授業を希望する生徒保護者が多い。通常学級在籍のCタイプの生徒と一緒に学習するSRを開設したことで、スムーズにSRでの学習に移行することができた。
- 今年度は可能な限り全てのタイプで教科担任制を実施した。各教科の専門性を生かして個別の指導計画や年間指導計画の作成にも関わってもらうことができた。
- 小人数で自立活動を付加した教科指導を行うことで、集中して学習に取り組めるようになった。学習の仕方も少しずつ分かるようになり、自信をもつことが多くなった。日常生活でも落ち着きが見られるようになり、人間関係のトラブルも減ってきた。「学習面における困り感」だけでなく、「生活・行動面の困り感」も軽減することができた。
- 多くの教員がSRで授業を行うことで、新たな気づきが増え、生徒への接し方や指導感が変わったりしている。SRでの指導法が通常学級でも生かされつつある。
- 発達障害、個別の教育指導計画、ユニバーサルデザイン、自立活動など、特別支援に関する様々な研修を行う機会を設けた。
- SR開設後、新たな不登校生徒は出ていない。
- 特別支援担当からは、現行の在籍生徒と関わる時間が減り、生徒の様子を把握しにくくなったとの指摘があった。
- これまでは特別支援教育担当が現行の特別支援学級在籍生徒を指導することが多かったが、今年度は教科担任制を取り入れた。そのため、何をどのように教えたらいいかわからないという疑問や不安の声が多く聞かれた。
- 多数の教員がSRでの授業に関わるようになったため、定期的にケース会議を開いて情報交換する必要性が生じたが、調整がうまくいかず、開けないことが多かった。関わる教員が多すぎて話し合いが深まらないという欠点もあった。

4 感想

特別支援教室構想のもと、生徒一人一人の困り感に寄り添い、理解し、共有してその困り感の軽減のために全職員で取り組む研究開発を視察することができ大変有意義であった。公開授業では、各タイプ別のスタディールームで生徒たちがいきいきと、前向きに、安心感をもって課題に取り組んでいた。「わかる」「できる」を実感できるための支援がいかに大切か改めて感じた。現行の教育課程の編成上では難しい面もあるが、特別支援教育の考え方を学校の教育活動全体に浸透させた支援の在り方は今後ますます必要になってくると思われる。今回得たものを校内の支援・指導体制に生かしていけるよう日々努力したい。